

# 『びわこ成蹊スポーツ大学研究紀要』の創刊にあたって

学長 森 昭 三

President Terumi MORI

## Foreword

We launched Biwako Seikei Sport College on April, 3rd, 2003. This is the first college in Japan to include the term “ sport ” in its name and as such it promotes a unique understanding of the diverse disciplines related to the development of sports.

Our goal is to cultivate creative, knowledgeable, and well-balanced professionals in areas that include not only athletes, but also trainers, counselors, management staff, journalists, and so on. It is these professionals who collaboratively achieve the successful promotion of sports in the country. In order to accomplish this goal, we believe it is essential to carry on our research and teaching, working closely with other institutions in Japan, overseas, and with communities outside of academia.

This bulletin, which presents our faculty’s most current research results, can be considered the college’s “ face ” as a research institution. Thanks to the faculty’s enthusiasm and collaborative efforts, we were able to publish this very first issue shortly after the opening of the college. I hope our faculty will continue to make contributions to this bulletin and thereby establish the tradition of producing high quality research.

本学は、2002年12月に文部科学省によって設置認可され、2003年4月3日に入学式を挙行しスタートした。スタートしたばかりの初年度から研究紀要を創刊できる運びとなったことは、教員一人一人の研究意欲に支えられてのことであり本当に喜ばしい限りである。

「研究紀要」は、大学の研究成果を社会に発信する最良の手段であり、大学の研究面の「顔」ということができる。本学は、どのような「顔」になっていくのであろうか。否、育てていくべき方向性（顔）を常に問い・議論し、私たち自身の手によってよりよいもの（顔）へと創造していかなければならないと考えている。

ところで本学は、従来の「体育」ではなく「スポーツ」という用語を使いスポーツ大学スポーツ学部という名称でスタートした。特に、スポーツ大学と、「スポーツ」を冠した大学名称はわが国において初めてということもあって社会的に注目されている。

しかし、真に問題とされるべきことはその用いた「スポーツ」という用語よりも、スポーツという「顔」を形作る中身であろう。本来、「体育」と「スポーツ」は厳然と区別できる用語であるにもかかわらず、現実には区別されずに用いられていることが多い。例えば、1946（昭和21）年以来、実際においては「スポーツ」の総合大会であるのに、これを国民「体育」大会と呼び、体育とスポーツが同義に使われているという周知の実例がある。なお、国民体育大会は当初より日本体育協会によって National

Sports Festivalと称され、スポーツとして海外へ紹介されている。

かかる状況を考えるならば、わが国においては体育とスポーツは同意語と解してもおかしくないのである。しかし、本学が「びわこ成蹊スポーツ大学スポーツ学部」と呼称する限り、「顔はスポーツであるが、中身は体育である」といった矛盾したことなく、「顔も、中身も真にスポーツをめざす」ことに挑戦したいと考える。

ところで、「体育」という冠をつけた体育系大学・学部の卒業生の進路は、長い間、中学校・高等学校の保健体育教師であった。しかし近年、教員市場の縮小の結果として、また一方では、教員以外の領域での職業機会が生み出されるようになってきたこともあって、近年では、体育系大学・学部のカリキュラムも教員養成以外の目的で編成されるようになってきている。

本学が「スポーツ大学」「スポーツ学部」という名称を用いたことには、体育教師という教育専門職分野以外のスポーツ専門職業人の養成をもめざしてのことである。と言うよりも、スポーツ専門職業人の養成に重点をシフトすることへの挑戦である。

今後、スポーツにかかわる専門職業人（スポーツ専門職）の養成についての実践理論的な可能性を科学的に検討していく必要があるが、いまのところ次のように考えている。

人それぞれがもつスポーツ要求（needs）を開発し、支援する人材の養成が社会的要請として考えることができ、4年間の大学教育によって専門職業人（professional）として自立させることが可能と考えるのである。

「スポーツ要求」には、「するスポーツ要求」と「みるスポーツ要求」とがある。横軸に0歳から100歳までの生涯発達過程の年齢軸を、縦軸に病弱者から壮健者までの健康度軸をおくならば、人はそのどこかに位置し、それぞれ「する」・「みる」スポーツ要求をもっていると考えることができる。この場合、スポーツ要求は自覚されている場合もあれば、自覚されていない場合もある。

ここでいう人々のスポーツ要求を「支援」したり、「開発」したりする場合には、対象が持つ課題に対する適切な「診断」と「処方」を必要とする。しかもその際、社会・文化・歴史的状況に埋め込まれた人の生涯発達の視点と生理的視点からスポーツ「要求」の本質をみきわめることができる人材が必要なのである。

これらについて具体的に説明する余裕がないが、例えば、「するスポーツ要求」には高度化と大衆化の二つの志向があり、きわめて多様な人材が求められている。前者の高度化（競技スポーツ、プロスポーツ）について言えば、今日では発達するスポーツ医・科学とテクノロジーを土台に無限の人間の可能性の追求を標榜している。そして、トップ・アスリートを生み出すためにはコーチ、トレーナー、スポーツセラピスト、カウンセラー、栄養士、マネージャー、広報担当等からなるプロジェクトチームを編成し、発掘・育成・強化・支援の4段階ロケットを装備する競技力開発システムが必要となっており<sup>注1)</sup>、これらを担う専門職業人が求められているのである。

ともあれ、こうしたスポーツにかかわる専門職業人の養成を確かなものにしていくためには、背景となるスポーツ学の研究とその教育、より具体的に言えば、特集テーマでもある「スポーツ学研究的課題と方法」とその教育方法といったことが、常に問われ続けられ、教育に反映されなければならない。

最後に繰り返すことになるが、本学の紀要の創刊に当たり、先生方各位が本誌を研究成果の発表・発信の場として積極的に活用され育てられることを切望するとともに、関係各位のご支援を心からお願いする次第である。

注1) 佐伯年詩雄(2003)の「現代スポーツの課題」(体育科教育 1月号)を借用し、補足していることをお断りしておきたい。